

若杉 実の

裏口音学

86

表が裏で、裏が表!?

若杉 実: 足利出身の音楽ジャーナリスト。雑誌への寄稿、連載をはじめCDのライナーノーツを執筆。CD、DVD企画も手がける。RADIO-i(愛知国際放送)、Shibuya-FMなどラジオのパーソナリティも担当していた。著書に「渋谷系」「東京レコ屋ヒストリー」「裏ブルーノート」「裏口音学」「ダンスの時代」新書「ダンス」。

ご意見などはブログ&メールまで。
http://wakasugim.jugem.jp/
wakasuginoru@hotmail.com

反逆の通奏低音



49days
「TOKYO 2020- 東京大会公式反対ソング-」
(49D Records)

五輪期間中、わが家のテレビはロシアンレットさながらの危険な装置となった。反五輪を決めこむからには頑として観ない。時間帯によって中継放送していない局をあらかじめ想定しておき、電源を入れた瞬間リモコンの数字を切り替える。しかし競技中の映像をわずかでも視界におさめたらゲームオーバー、テレビのまえから立ち去らなければならない。マイルールだが、組織委員会が導入するバブル方式よりも厳格であることは付言しておく。

そういうわけで、今夏は酷暑との二重苦により、例年以上に夏負けを加速させるハメになった。暴走五輪への嫌悪感を活字にすることさえかつたわけではない。スポーツそのものを否定しているわけではない。スポーツをすること以上にスポーツ観戦は好きだし、根が昭和のメンタリティであるゆえにサッカーではなく野球派。本塁打の記録更

新が止まらない大谷翔平が目下、心のよりどころとなっている。

だが、今回の五輪のゴタゴタ劇の元凶こそ、そんな昭和を引きずるオヤジ体質であったことは冷静に考えなければならないだろう。組織委員会会長の女性蔑視発言にはじまり、あらゆるトリガーになっていたのは“五輪は別格”という大時代な価値観だ。野球も欧州ではマイナーだが、五輪だって日本人がおもっているほど世界で特別視されていない。神聖視しがちな聖火リレーなど、そもそもナチスが人種政策に利用するため考案したものだ。足利市民にしてみれば、リレーに参加した勝俣州和の長ズボン姿が観られたのは拾い物だったかもしれないが。

いやいや、そんな皮肉はまだ手ぬるいといわんばかりに反五輪歌を世界最速でうたっていたのが、Jポップ系の49daysにパンク系のSEVENTEEN AGAINである。前者は2013年に「TOKYO 2020」を、翌年後者は「トーキョーオリンピック」を発表していた。おたがい接点もなければ音楽性も真逆。だが、過激な歌詞に織り込む主張は共通している。それは感動の押し売りへの拒

絶だ。コロナ禍以前に発表したのもそのような理由があったから。五輪以前に、運動競技を優遇する日本の風潮に彼らはついていけなかった。

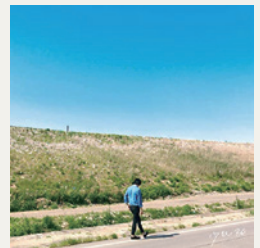
49daysのリーダーは、こどものころからそのような世間との折り合いをつけられず、社員になるとスポーツ狂の上司からの差別に屈し、やむなく辞表を提出している。そしてそのトラウマは五輪招致を封じるニュースによって再燃、テレビをつければ「お・も・て・な・し」とクサイ演技をみせられ、おまけに裏金疑惑まで浮上する始末。憤りが吐き出されるように歌詞が湧いてきたという。

かたやSEVENTEEN AGAINについて。本人たちの声明が届けられていないため、反五輪歌と紹介するのは早計かもしれない。しかし「ぶっちゃけ勝者か敗北者か興味ね〜 つまりちよーおもしろくね〜!」とパンクッシュに叫び、収録したアルバム名“少数の脅威”をもにおわずなど、反体制を敷いているのはあきらか。

だが、皮肉にもその少数派は現状、与党を中心とした強行開催派だ。しかもそれは、“世界を牛耳る1%の富裕層”という黒い影とも重なるからおそろしい。南無三。

SEVENTEEN AGAIN 『少数の脅威』(「トーキョーオリンピック」収録) (KiliKiliVilla)

CAR 10(足利)とも同朋の彼らはヤブソンを中心に2004年結成。「トーキョーオリンピック」は最初にカセット『恋人はアナーキスト』で発表後、3枚目の本作に収録された。この9月の新作『世界は君たちを変へることは出来ない』には、深夜の新国立競技場がPVに映る「東京2021」も収録、若者の未来をシュールにつづっている。49days(四十九日の意)の曲の元ネタは藤本美貴「ロマンティック浮かれモード」とみた。



掲示板 NOTICE BOARD

組子細工で北斎の浮世絵を

組子とは小さく切った木片を、釘を使わずに組み合わせて美しい幾何学模様を作り出していく伝統工芸品のこと。今ではほとんど見られなくなりましたが、日本家屋の障子の棧(さん)などに使われていた。その組子細工で葛飾北斎が描いた『足利行道山くものかけはし』(足利市)の曲の元ネタは藤本美貴「ロマンティック浮かれモード」とみた。

渡辺さんは昨年、北斎の『神奈川沖浪裏』を組子で再現したのに続いての挑戦であるが、今回は、色付けを足利市地域おこし協力隊の秋山佳奈子さんと毛野南小学校の生徒が協力、来年春ころの完成を目指している。

屏風の大きさは畳3枚分で、1枚当たり4000個近い正三角形が組まれている。ここに色付けをしたコマをはめ込んで、絵にしていこうという。

写真は秋山さんのアトリエ(足利市通5丁目)での色付けの様様。



北斎『足利行道山くものかけはし』